

狂歌咄の人物：雄長老雑記

花田， 富二夫

<https://doi.org/10.15017/4755939>

出版情報：雅俗. 1, pp. 59-84, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



狂歌咄の人物

——雄長老雜記——

花 田 富二夫

一 はじめに

建仁寺第二百九十二代住持にして、五山の傑僧であつた英甫永雄こと雄長老は、細川幽斎を叔父に、曲直瀬道三（玄朔）を外戚に持つなど、華麗な親族關係を背景に文学的土壤の中に成長した。その文事・出自に関しては小高敏郎氏によつて研究の緒が開かれ、以後伊藤東慎氏、蔭木英雄氏^註によつて、その文事や伝記的部分が少なからず解明されつゝある。ただ、同じく学僧であつた父の竜泉寺殿司農蒲潤稜公大禪門の俗名をめぐつては、信高か信重か、その依拠資料によつて両説が存している。また近年、蔭木英雄氏、浜田啓介両氏によつて彼の著述漢詩集『倒痴集』が翻刻^註され、漢詩を通じた彼の思想・文学が極めて手近に繙読できるようになつた。だが、この他に彼の法語集たる『羽弓集』や、夥しい量の和漢の連句、更には、多くの狂歌等が存しているのであり、その具体的な解説作業はまだ全体には及ばず、これらは今後の大きな課題である。

さて、ここに些か拙文を記すのは、彼が五山の禅僧として和漢の学に秀でつゝ、一方、艶詩をはじめ、狂歌の名手として世に名を馳せていた点にある。これらは後に狂歌咄として結実してゆき、彼自身がその主人公として点描された。ただ、その数は予想に反して極めて少なく、雄長老狂歌咄として一考を論じることが難しい。そこで本稿では、彼の狂歌咄を基に、主に『倒痴集』との関連に着目しつゝ、その周辺について小考を試みたい。

二 狂歌咄と雄長老

(イ) 『醒睡笑』

彼が狂歌咄の主人公として登場してくる最もまとまったものは、安楽庵策伝作するところの『醒睡笑』である。本書には多数の彼の狂歌と共に、それにまつわる笑話が記載された。後に『狂歌大観』索引を基に、重出歌を整理し直した狂歌一覧を補注として掲げておく。

さて、『醒睡笑』に載る雄長老狂歌咄は次の24箇所である。やゝ煩雑ながらその部分を補注の狂歌番号と共に記しておく。

- (1) 卷一「謂へば謂はるる物の由来」 31 — 補 90
- (2) 卷一「落書」 33 — 補 15
- (3) 卷一「同右」 40 — 補 9
- (4) 卷一「祝ひ過ぎるも異なるもの」 3 — 補 18
- (5) 卷一「同右」 4 — 補 14
- (6) 卷二「名付親方」 4
- (7) 卷二「同右」 19
- (8) 卷二「腔」 1 — 補 93
- (9) 卷二「賢だて」 4 — 補 55
- (10) 卷四「そでない合点」 21 — 補 26
- (11) 卷四「同右」 28 — 補 13
- (12) 卷四「唯あり」 3 — 補 33

- (13) 卷五「人はそだち」 18 — 補 86
 (14) 卷六「児の噂」 7 — 補 113
 (15) 卷七「思の色を外にいふ」 3 — 補 45
 (16) 卷七「謡」 11 — 補 116
 (17) 卷七「同右」 49 — 補 44
 (18) 卷八「頓作」 48 — 補 52
 (19) 卷八「同右」 55 — 補 82
 (20) 卷八「同右」 57 — 補 77
 (21) 卷八「かすり」 17 — 補 10
 (22) 卷八「茶の湯」 17 — 補 57
 (23) 卷八「同右」 18 — 補 43
 (24) 卷八「祝ひすました」 14 — 補 42

以上であるが、表示の如く、(6)・(7)の咄には狂歌が存していない。人に命名するそのおかしみを狙ったものである。また、これ以外『醒睡笑』巻一「鈍副子」13の「風でないわたがみ」の項には、狂歌が付され、その作者名は記されていないが、その狂歌は補注56の「古今夷曲集」642と同じであり、同書には雄長老作と記されている。この作者付に従うと『醒睡笑』本話を追加しなければならない。又、『醒睡笑』巻五「嫉心」4と、同5の話は雄長老母宮川尼にまつわる話であり、雄長老関連説話となっている。補注の如く、『醒睡笑』のみに記す狂歌は十首であり、逆に『詠百首狂歌』を基に『醒睡笑』に採られたのは十一首であった。また、鈴木棠三氏の指摘（註）によると前表(18)は『新旧狂歌誹諧聞書』では「よみ人不知」となっており、同様に(19)は『遠近草』で桂外記、『後撰夷曲集』で玄旨となっており、その作者付に揺れが見え、この種笑話本の不安定な伝承の様相を見ることができると言える。

その意味では(10)も『醒睡笑』では雄長老作となっているのであるが、『詠百首狂歌』の也足軒の評語たる詞書には、山　この養生の趣善賀の作にやとそおほえ侍る

とあり(陽明文庫本も同じ)、本狂歌が善賀なる人物の作であった可能性が生じる。この歌の眼目は富士山に灸穴である「ふじ」をかけて、足をひくさまの「ちがちが」を「近々」に利かしたものである。この善賀が何者であるか今の所不明であるが、後注の如く、端午の和漢連句に英甫と共に一座している。^註更に『倒痴集』追悼の部分には

慶雲善賀禅定門看々立卒堵波於安楽寺

とあり、禅僧慶雲善賀は、雄長老存命中に逝去し、安楽寺に葬られたことを知る。その追悼の詩は左の通り。

慶雲五色忽焉生　慶雲ノ五色忽チ生ズ。

此是真公案現成　此レハ是レ真ノ公案、現成。

且喜諸人敬耳聽　且ニ諸人、耳ヲ敬テ聽クヲ喜バントス。

果然天鼓自然鳴　果然トシテ天鼓自然ニ鳴ル。

僧名慶雲に五色雲(五雲とも)を利かせ、絶対の真理の中の高僧の姿を示した。自然と天雷・寺鐘も響き、天も呼応するかの如くである。最大の猷辞を贈ってやまない。慶雲についても今の所探索し得ないが、安楽寺は鹿ヶ谷の安楽寺であろうか。かつては浄土宗西山禅林寺派(『日本名利大事典』)と言う。これらのことより、雄長老が善賀と親しかったことは確実であり、『詠百首狂歌』の記載も注意する必要がある。とすると、他作編入の可能性も生じるが、今は結論を控えたい。

次の(11)には二首の狂歌が記され、前者は記載の通りであるが、後者には美濃の国に野瀬といふ碁打いまはの時

碁なりせば劫を棄てても活くべきに死ねる道には手一つもなし

と記され、野瀬という人物にまつわる話となっている。この狂歌は『古今夷曲集』巻九によると「臨終に碁打なりせば　算

砂」として記載されているのであり、前表(17)の秀吉聚楽第(落成は雄長老建仁寺住持となつた翌年の天正十五年)に於ける能見物時の狂歌相手本因坊その人である。両者は、『言継卿記』等に記せる文禄四年三月二十六日の謡本注釈作業にも座敷替ながら同座しており、文人として共通していた。とすると、当狂歌には算砂がふさわしいのではなからうか。

又、雄長老との交友を示すものとして(2)には、「京都六条道場に文閑といふ連歌の作者ありき」として、文閑上人の父親の逸話を載せ、その父親名をもじつた狂歌を作している。『羽弓集』の中にも、「文閑上人住勧喜光寺」と注してあり、文閑は当時の著名な連歌師であり、幽斎とは勿論、雄長老とも度々和漢連句会で同座している。

以上の狂歌は、この様な雄長老と諸友との交流の場での遊びであつたのであろう。

では、『醒睡笑』の説話の在り方はどのようなものであつたらうか。一、二例を用いてみる。まず前表(1)は次の様な話である。

理をは非になし、非を理になし、顔をあかめ、興をさまし、むさと物ごとによこさまにわめく者を、なべて世の人、あれはいかいどろふみよといふ事、はだしちやとの縁語なり。雄長老 春雨の風にしがふかいだうはしるくなれども早かわきけり

右は海棠の花に街道を利かせ、しるい(道のぬかっていること)よりどろふみ(横車を押すこと)に転じたもので、内容と狂歌とはそれなりの一貫性を保っている。また、陽明文庫本『詠百首狂歌』では「かい道」と記され、街道の意が更に明確化されている。この狂歌に対する也足軒評語は次の通りである。

春雨 路次のはやくかはきたる心可然詞のつゞき御惱楊貴妃のうたいをよくおほえられたる也

この楊貴妃のうたいとは、直接的には謡曲「皇帝」の

げにや春雨の風に随ふ海棠の眠れる花の如くなり

の文句取りによるものであり、也足軒評語はこの点を指摘したものであつた。もと美女の形容であつた海棠を路次に転化せしめたのが雄長老とすると、それを一ひねりし、理非を弁えぬ人の様として俗語を交じえて転じた妙が策伝の工夫であつた

と言えよう。この海棠は、『倒痴集』の中でも705、747首をはじめその他度々好んで詠じられている。一例、『倒痴集』書き出し部分第10首目（天正二年ごろか）「十月海棠」には、

十月如春日已温　十月春ノ如キ日、已ニ温カナリ。

海棠紅綻映梅村　海棠ノ紅綻ビ梅ニ映ズル村。

斯花莫向炎洲植　斯ノ花炎洲ニ向カヒ植エルコト莫カレ。

只恐雨声恼睡魂　只雨声ノ睡魂ヲ悩マスヲ恐ルメノミ。

とあり、小春日の梅村に映える海棠の花が、雨声に睡魂が妨げられないようにと詠じられている。これは『東坡詩集』巻二十一「雨晴後步至四望亭下魚池上」の詩、

雨過浮萍合　蛙声滿四隣　海棠眞一夢　梅子欲嘗新　挂杖間挑菜　鞦韆不見人　殷勤木芍藥　独自殿

ニ余春

等の梅村雨中の海棠の花を詠ずる境地と通ずるものである。梅子は、禪家で来客用のもてなしに用いるもの。この様に海棠は彼の壮年時より愛着を持ったものであり、当狂歌の成立する機縁として充分予想できるのである。また、前述の如く謠本注釈作業に加わった者として、その謠曲詞辞を利用することなども、彼の一つの方法として注意すべきであろう。

次に前表(13)は次の様な話である。

堂前に古りたる松一木あり。老僧、少人にたはぶれ、あの松は男松であらうか。妻松であらうか知れぬよ。歌よみの子息出で、妻松にてあらん。月のさはりになる程に。土民の子、いや男松にすうだ。あれほど松ふぐりのあるものを

天のはしだてにて　雄長老

橋立の松のふぐりも入海の波もてぬらす文殊しりかな

や、卑俗に属すこの歌は、付話と共に一読すれば雄長老説話の如くである。だが、鈴木棠三氏の指摘の如く、^{注9}『狂歌咄』巻三では比叡山、北谷の覚成坊あざりを主人公とする話となっており、狂歌自体も相違している。更に『遠近草』^{注10}二九にも狂

歌は存しないものの、同じく覚成坊の話として登載されている。ただ、この歌が雄長老の作であることは、『詠百首狂歌』評語に、

松 所にをきての名所一首したて珍重く 橋たてのまつのふくりも入海の浪もてぬらす文殊尻哉とある点や、又、『古今若衆序』（幽齋作の伝も存すが）に

世につたはる事は、久かたのあまのはしたてには文殊尻よりはしまり

とあることなどより動かない所であろう。この狂歌の眼点は、天橋立南方の九世戸、智恩寺の文殊師利に尻をかけ、松ふくと共に卑猥な哄笑を誘った点にある。

さて『倒痴集』には、九世戸智恩寺での詩詠が存している。第148首目に「於九世戸智恩寺」として、

海上村遙山亦幽 海上、村遙カニシテ山モ亦幽ナリ。

長沙松古響颺颺 長沙、松古リ、響キ颺颺タリ。

浪花却勝瓊瑤影 浪花却リテ瓊瑤ノ影ニ勝ル。

丹鳳橋辺暫駐舟 丹鳳ノ橋辺暫シ舟ヲ駐ム。

海辺にたゆたう村、山もまた幽かなり。浜辺の松は風に枝を鳴らし（颺颺：風の吹き渡る音）、波が佩玉（瓊瑤：美しい佩玉）の影をうばう。丹塗りの橋辺にたたずみ、しばし、舟をとどむ。これは、『三体詩』巻三劉方平の「秋夜泛舟」の「林塘夜泛舟 蟲響荻颺颺 萬影皆因月」や『陸放翁詩鈔』七言詩「岳陽樓」第9句目の「浪花遮尽君山青」等の詩語に根差すものであり、狂歌の世界とは大きくかけ離れている。また、天の橋立での詠は151首目にも存している。「臘月十三賀藤孝徒宮津浜新城」として、

天橋近処築城邕 天橋近キ処、城邕ヲ築ク。

仙様高楼知幾重 仙様ノ高楼、幾重ナルヲ知ラン。

恰似葛洪勾漏昔 恰カモ葛洪勾漏ノ昔ニ似タリ。

深根固蒂護丹松 深根護丹ノ松ヲ固蒂ス。

とあり、古代の神仙葛洪の勾漏の昔に託して丹陽の松を詠ずるが、当詩に關しては蔭木氏論^{註11}に詳論が備わる。概して松は、白居易七言律詩「尋郭道士不遇」(『三体詩』所収)の第三四、五六句目にも「看院只留雙白鶴 入問唯見一青松 葉爐有火丹應伏 雲碓無人水自舂」とあるように、丹を練る仙家の跡に見える景物の一つでもあり、「松ふぐり」の仙と俗との取り合わせが奇妙に生々しい。細川藤孝が信長により丹後領を与えられたのは天正八年八月ごろとも言われ、その際雄長老もその賀宴に連つたと思われる。因みに也足軒中院通勝も当年六月に勅勘を蒙り、藤孝の許に逐電していたとの説もある。

『羽弓集』には、天正十二年六月二日、幽齋が田辺で営んだ信長三回忌の法要の件が記され、そこには、

此邦昔葛洪丹井上有数尺松 名之曰護丹松吾丹陽亦有天橋数尺松 呼作護丹松亦何妨其子葉也、其孫枝也 繁茂千千歲以深根固蒂者削目 族之至祝至禱

とあり、151首の成立事情を更に伺わせる。護丹の丹は丹陽の丹でもあった。

以上、天橋立と松の狂歌は雄長老の実情と極めて密接な關係にあつたことを知れるのであり、当時の人々にとっては容易に納得できるものであつた。策伝はこの様な背景を恐らく知悉しながら、男松・女松の笑話を添付し、恰かも雄長老笑話の如く仕組んだと思われる。

後に、斎藤徳元が『塵塚俳諧集』において

神無月ばかりに丹後国橋立一見のため、友だちに誘引せられまかりて

はし立や波さえぬらす文珠しり

と詠じたのも、一つには、当狂歌を本歌とするものであつたらうか。名所象徴の一詠でもあつた。

さて、策伝と雄長老との具体的関連を示すものとして従来、『倒痴集』563首の次詠が指摘されてきた。^{註13}「同日戲賦庭上景」として、

安楽主人隣壁東 庭前競種百花叢 未吹燭火榴根石 遙対青山杉外風 入室梅香無意柏 薩苦芍薬夜又棕 籬辺秋菊遠而

□ 春晚先看躑躅紅（安楽主人壁東ニ隣ス、庭前種ヲ競フ百花ノ叢、未ダ燭火ヲ吹ザル榴根ノ石、遙カ青山ニ対ス杉外ノ風、梅香室ニ入ル無意ノ柏、薩菩ノ芍薬夜又ノ棕、籬辺ノ秋菊遠クシテ□、春晚先ズ躑躅ノ紅ヲ看ル）

この安楽主人は、どうやら隣壁東側に住し、庭前には百花咲き乱れ、石榴の花は紅。六句目「薩菩芍薬夜又棕」は「芍薬、花開、菩薩、面、櫻欄、（しゅろ）葉散、夜又、頭」と同意で、芍薬の花は菩薩の顔のようにたおやか、しゅろの葉は夜又の頭のようにばさばさ、しかしそれぞれに真実を露呈する（『禪語辞典』）という意であり、花あくまでの美しさを詠ったか。晩春、躑躅の紅色が鮮かである。さて、この安楽主人を安楽庵主人策伝と見なしてよいか。当詠は、前詩562首が「屈指吾今半百年」とある点よりして、雄長老50才時、即ち慶長元年ごろと考えられるが、関山和夫氏の研究につくと、策伝和尚は、中国地方で諸寺院を建立した後、文禄三年に堺正法寺第十三世として入山し、三年後の慶長元年には美濃国浄音寺第二十五世として転住したとされる。その後慶長十八年に京都誓願寺第五十五世として入住し、元和五年には紫衣勅許という僧侶の最高位を極めた。この誓願寺塔頭竹林院に隠居し、安楽庵いうところの茶室に雅交三昧の日々を送り始めたのは、元和九年七十歳の時（『醒睡笑』序文）以後である。確かに『策伝和尚送答控』の中に、法眼正意が、「答安楽翁和歌之韵」として

安楽主人安楽国 唱歌山水得仁壽 吟中更挽着陽春 十月梅花調旅袖

と「安楽主人」と呼びかけているが、これは晩年に属する。だが一方『百椿集』には、堺正法寺に住せしより慶長十九年まで心を花に染め、近国より様々な草木を集めていた事を記しており、種々の花卉は策伝の愛好したものであり、そうとると、当詠はまことに策伝にふさわしい。だが、文禄三年十二月には、雄長老は南禅寺の公帖を受け紫衣を拝領し（『鹿苑日録』）、又、『倒痴集』567首には「於両足」と両足院在院を記している点より在京と思われ、とすると策伝が、堺、あるいは美濃へ赴くにせよ、一時的に出京していなければならぬ。すると、このような百花繚乱の花庭を築き得るだろうか。安楽主人という（一般的意味でも良いが）人物を特定できぬ今、通説に従うべきとは思いますが、些かの疑念を呈しておく。ただ、当詠が堺などでの詠であった場合（天正十九年には堺光明寺で通勝との両吟和漢千句を始めている）その可能性は高まるであろう。因みに、隣壁とは特殊の意味がない場合となりの意であり、建仁寺東隣は高台寺、南禅寺北東は禅林寺（策伝が若きころ当

山甫叔上人に師事した)であるが、これ以上の贅言は控えよう。又、当詠三句目「燭火」は『莊子』逍遙遊一等にも見え、前詠562首の「素王」も『莊子』天道篇中の人名でもあり、両詠に『莊子』を中心にした関連性がない訳ではなく、『倒桐集』構成が他の部分に徴し比較的忠実な年代順に従っていることも事実である。

(四)『醒睡笑』以外

冒頭述べた如く、雄長老関係狂歌咄は現在までの処、極めて少く、本節では二例を録すに止まる。

まず『寒川入道筆記』(慶長十八年成立)には次の様な説話が存する。

一とせ信濃国善光寺如来御在京として御のほりのとき、則、本田善光御供也。是を粟田口にて雄長老御見物なされ、とりあへず つみをきる弥陀のつるきや是ならん 粟田口より出るよしみつ

右は、本田よしみつに、名工粟田口よしみつを利かせ、刀剣のみならず仏法の弥陀の剣に取りなした点にある。この善光寺如来の件は事実に基づいて居り、『史料綜覧』によると、慶長二年七月十八日に、秀吉が善光寺如来を甲斐より移し、山城方広寺大仏殿に安置した件を指す。その具体的様相を『舜旧記』に拾うと、

慶長二年七月十八日 天晴 信濃国善光寺如来入洛、近年乱国故、甲斐国ヨリ御上洛、大仏殿之本尊安置也、路次行粧歴々也、御迎衆、天台宗百五十人、真言宗百五十人、都合三百人、僧乗馬法服装袈裟ニテ具奉也、門跡称高院殿、三宝院殿、大佛寺殿、梶井殿、竹内門跡後陣、聖護院殿前駆、木食上人、楽人衆騎馬也、如来御厨子如鳳輦也、旗二行二八本都合十六本、与浅野彈正少弼後陣之騎馬也

と、あるように、秀吉の国乱への危機感の表れであった。それに僧侶衆も多数駆り出された。特に秀吉が朝鮮出兵同行まで求めた五山僧も一通りではなかっただろう。雄長老自身も、『鹿苑日録』によると直接的ではなかったものの、天正十九年には朝鮮出兵の併行に推挙されるほど重きをなしていた。この善光寺如来の件は、慶長三年八月十七日、雨小降の中で、「善光寺如来帰国、太閤依靈夢告俄信州え帰国也、路次之義俄勘略^{云云}」(『舜旧記』)と、秀吉の夢告により帰郷させられている。そして、翌十八日、秀吉は死去した。血なまぐさい世上の動乱にあって、罪を切る名刀よしみつに託したものは何

であつたらうか。

『百物語』（万治二年刊）上の第十八話は次の様な話である（ルビは省略）。

幽齋と友長老とのつけあひの句おもしろしとて、人の語りしは、かりそめに見るをうらやむ草の庵といふ句に、いつはりとなる人の言の葉といひ給ふ句は、相逢^{フチ} 尽^ク道^ヲ 休^メ官^ヲ去^{ラント}、林下何^ソ曾^テ見^ソ一人^ヲとつくりし詩の心にてつけられし妙句とかや

幽齋との付合の妙を眼点とした右の話は、文中詩文より『三体詩』七言絶句、僧靈徹の「答^フ 韋丹^ニ」の左記詩文を下敷にしている。

年老^ヒ 心閑^{ニシテ} 無^シ外事^一 麻衣草坐^亦 容^ル身^ヲ

相逢^テ 盡^ク 道^ヲ 休^メ 官^ヲ 去^{ラント} 林下何^ソ曾^テ見^ソ一人^ヲ（『三体詩素隠抄』「抄物大系」所収影印文による）

既に年老い、世事を離れ静かに暮らしていた靈徹の許へ、韋丹が、自分も官を辞し共に過ごそうと言つてよこしたが、それは口ばかりで、今まで一人として林下にひつ込んだ者は居ないという気持ちを詠つたものである。退隱を志しながらも心は俗事を離れず、偽りを言う人心を詠つたもので、『三体詩』を愛好した雄長老の特質がよくとらえられている。また、当詩の利用は、『倒痴集』382首にも「林鳥^{当座}」として、

飛鳥倦^ニ 飛西^日 頽^ク 飛鳥飛^ブ ヲ 倦^ミ、西日頽^ク。

樹陰争^ニ 宿^ヲ 暫^シ 徘徊^ス 樹陰宿^ヲ 争^ヒ、暫^シ 徘徊^ス。

向^リ 林下^ニ 欲^シ 休^ム 官^ヲ 去^{ラント} 欲^ス。 林下^ニ 向^カ ヒ 官^ヲ 休^メ 去^{ラント} 欲^ス。

喧^シ 耳^ヲ 鵲^ノ 群^ヲ 伝^フ 吉^来 耳^ニ 喧^シ 鵲^ノ 群^ヲ、吉^ノ 来^ル ヲ 伝^フ。

と用いられ、飛ぶのに倦み、宿を争つて徘徊する鵲の姿に退隱の様を重ね合わせ、それは又、鵲喜と言われる如く吉事の前兆であるとする。僧侶に相応わしい離俗の雰囲気に含まれている。この点も当狂歌咄が雄長老関係話として成立した、その背景を更に強めるものであろう。

三 諸記録と文事

雄長老の動静は、『鹿苑日録』や『有節瑞保日記』等により幾分か知られるが、前者の記述による重要な件は前述のように天正十九年八月六日鹿苑に代わり、朝鮮出兵の供奉に推挙せられたことであり、また文禄三年十二月廿四日には南禅寺公帖を受諾した点などである。そして天正十九年からは毎年禁中の和漢会に列し、特に文禄三年十二月四日、五年七月二十八日には入韵している。前者「洞寒老鶴鳴矣」、後者「垂絲塘柳風」。その中より、特に文禄三年十一月廿七日の件を抜き出すと、次の様である

齋了待禁闕和漢発句日野殿也。庭ニケサ見又山風ノ落葉哉。入韵御製。出雲寒月移。及深更退出也。漢衆雄長老、予也。
雄長老云於東山秉拂勤之。玄策字 出世之望云々。諾矣。

『倒痴集』文禄三年の頃の詠詩は510首（「明皇四十八新正」とある）以降と思われ、552首には特に「於鹿苑大会」として「夜寒無夢」の次詩が記されている。

風簸破窓飛雪天 風簸窓ヲ破リ、雪天ニ飛ブ。

終宵無夢聽更遷 終宵夢無ク更ニ遷ルヲ聽ク。

周公不到素王枕 周公素王ノ枕ニ到ラズ。

況是单衾閔子騫 況ンヤ是レ单衾ノ閔子騫ニヲヤ。

周公は『論語』述而篇「子曰、甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公」の孔子が周公を夢見る故事で、夢そのものを指すとも考えられる。素王は前述『莊子』中の、王位を持たなくとも王者の徳を備えている人物、閔子騫は『蒙求』他に所出の「閔損衣单」の孝子閔損で寒夜に苦しんだ。この様に当詩は中国故事の世界を借りて夢を結ぶことのない寒夜の思いを詠っているのであり、前記『鹿苑日録』項の冬日の彼の所懐を偲ぶことができる。

『三藐院記』には、天正十九年四月二十日の連歌千句を記す。

『慶長日件録』には、慶長五年正月四日の項に、「次建仁十如和尚來訪 孔方兩ヶ給之」とある。

『時慶卿記』（内閣文庫蔵・明治補写本）天正十九年四月十六日には「天晴、行水衣冠ニテ禁中和漢御執筆に参初日ヒ召如儀候」として、

聖護院准后・妙法院宮左大臣・日野大納言・日野新納言・水無瀬中納言・廣橋中納言・右衛門督・季滿朝臣・積善院僧正・玄圃・西咲・有和・有節・英甫・時慶以上十八人此衆ニテ千句可ヒ成御興行旨内之御試之午刻ニ果之初ハ已上刻之御会後於番所食ラ各々ヒ下候 其後又御前へ召候 和尚衆へ書籍共ヒ撰目錄ヒ仰付候 其後入御申又盃出台物ニテ御酒アリ僧衆誹諧在之其後退出

とあり、興行の具体的様相を知ることができる。又、文祿二年四月十九日には「雄長老へ切紙遣一昨書ヲ借用シ則写シテ返」とある。

さて、雄長老の文事としては、『三体詩』を愛読したことは、『戴恩記』に記された所^註であったが、『舜旧記』中には『莊子』講釈の件が度々記される。以下、抜き書きしてみると、

文祿五年○二月九日天晴 建仁寺於十如院雄長老莊子講尺始予令聽聞者也

○六月六日於建仁寺 莊子講尺ニ罷也

○六月十四日幽齋女房衆ヨリ帷サラシ一つ音信也 莊子講尺アリ 祇園会也

○廿一日雨降 莊子講尺アリ

○廿六日天晴 莊子講尺休聞也

○閏七月 朔日天晴 莊子講尺建仁寺罷也

○六日 莊子講尺アリ

○九月四日天晴 建仁寺之内 十如院雄長老來也 栗鬚箆持參也

また、慶長二年九月廿一日の項には、

建仁寺之内十如院之母儀へ見廻罷也、錫双肴・三重箱ニフノヤキ、予持参也、同長老へ油煙二挺、音信申也、丹後国へ下向、留守申置了

とあり、丹後下向のことが知れる。これらより、雄長老は建仁寺内で『莊子』の講釈を行っているのであり、梵舜等もそれを聴聞に出かけていたことが判る。また、南禅寺では我が国『莊子』研究の嚆矢たる、僧惟肖の『莊子口義鈔』も行われていたと思われ、当時の学僧としては、蓋し当然の学識であった。

以上より、『三体詩』、『莊子』、『蒙求』等は、雄長老の詩作に当って重要な書物であったことが分り、『倒痴集』内にもこれらの影響を多く見ることが出来る。最後に一例ずつ示しておこう（以下訓読は省略する）。

676 夏月光晴未落西 子規驚夢聒孤聞 広寒有ケ木犀樹 夜半声々高上啼 月夜聽鶉

○『三体詩』、七言絶句「山中」（願況）による。

野人自愛^ス山中^ノ宿 况是葛洪丹井^ノ西^ヲ

庭前^ニ有^リ個^ノ長松樹^一 夜半^ニ子規来^リ上^テ啼^ク

長松樹と木犀樹の相違はあるが、末句を中心とする景は同一であろう。猶、前述葛洪の丹との関係も考慮した。また『倒痴集』第60首「月夜聽鶉」も同趣である。

657 絃誦琅々鶯囀高 儒生似化著黄袍 何編呂望非熊話 知是蒙求耶六韜 鶯有書声

○『蒙求』第四話「呂望非熊」の話に基づく。

「六韜^ニ曰^ク、文王將^ニ田^セ 史編布^テト^リ曰^ク 田^セ於^テ渭陽^ニ 將^ニ大^イ得^シ 非^ズ龍^ニ 非^ズ影^ニ 非^ズ虎^ニ 非^ズ熊^ニ 兆

得^シ公侯^ヲ 天遣^リ汝^ニ師^ヲ 以^レテ^ラ佐^ク冒^ヲ 施^ベテ^バ三王^ニ。 (以下略) とあるように、『蒙求』(徐注本)は『六韜』より、太公望(呂望)が文王に召されるまでを記す。末句は、そのことに則るが、前二句は、鶯鳥を儒生に見なし、その鶯轉の法誦学業の様を記す。宋代、方岳の『方秋崖集』巻十一には、鳥が蒙求の一句を覚えて、呂望非熊と囀るとい

う話があるという。^{注17}この他に「呂望非熊」の話は度々使用される。次に参考迄に挙げておこう。

95 春去千林緑作堆 金衣雖老暫徘徊 蒼々夏木是周德 呂望非熊盈耳哉

代梵広上司

117 春禽磔々翫晴天 夢未熟時驚孰眠 呂望非熊縱滿耳 枕辺刪迹傅岩賢

490 黃鶯出谷弄晴晨 來報昇平樂世人 呂望非態為盈耳 武王天下洛園春 鶯声語昇平

『莊子』に關しては、既に蔭木氏^{注18}により「漆園書」を詠った593、404首の詠の指摘がある。その他に、

519 常為風光依逸籬 群紅春過宿紅葵 苻堅夢与莊周夢 奈□花飛蝶駭時 紅葵胡蝶

○『莊子』「齊物論」胡蝶夢によること明白であらう。

四 おわりに

補注51に載せる如く、雄長老は艶詩の方にもよく特徴が表れていた。『倒痴集』にも本稿では触れなかったものの、梅岳宛艶詩等その実情を垣間見ることが出来る。一例をあげると、

498 平生雖不説吾心 双袖龍鍾縁思深 每聽有淚惱情先 佳人名是雍門琴 依淚顯恋^{比什吟末了}

本詩二句目は、やはり『三体詩』五言絶句岑参の「逢^フ入^ル京^ニ使^ニ」の第二句目「雙袖龍鍾涙不乾」によるのであるが、この方は故園を思ふ涙に対し、『倒痴集』は「縁」を思ふのである。嘗て孟嘗君を感動させた雍門周の名琴も佳人を偲ばせるのか、詩題「依淚顯恋」の如く、恋心の発露であった。

その他、彼の感懐を偲ぶものとして、二、三挙げておこう。

33 行^ヌ者^ノ帰^リ兮^ノ帰^ル者^ノ行^キ 他郷故国苦斯生 豈唯千里若^シ鞋耳^{ソヤ} 人世元來是旅程 旅(天正4年ごろ)

391 露宿霜床一旅身 夢帰旧里適逢親 松声晚入枕中後 露宿霜床一旅身 風破旅夢^{首尾吟} (天正16年ごろ)

右はいずれも故国を離れ、人世を旅と見る観点である。親に逢うのも夢中という、旅身の嘆きを詠じている。

また、時には、孤独感が襲う。

72 萬戸祝春斟綠醅 殘僧独醒拏茶盃 愧吾門巷背花寂 去歲來人今不來 (天正6年詠)

そして彼自身は蔭木氏トウキが述べられた如く、病氣がちの内にあって詩詠を試み、時には苦しみながらも、しかし、その文事の世界に俗間を離れるのを楽しんでやうだ。

81 乳口絶吟詩有魔 羨君如琢又如磨 病身厭聽浮世事 猶向秋風感慨多 (天正10年頃)

此処の君とは古澗を指す。乳口とは詩作の卑下か。なお488首には、「于時予臥病」の詠として、「去来不想独逢春 病身今歳又成夢 院裏見花必別人」と、その病かなり重かったことを知る。勿論、このような中にあっても酒を嗜み老を慰む詩境(474首)も見せている。

以下省略に従うが、この様に『倒痴集』には雄長老の人となりや文事の様が多方面に亘って知られるのであり、それらは更なる解説作業を待たなければならぬ。そして、彼の全体像に近づくには、歌学・漢学・連歌・禅学全般への配慮が必要である。本稿は中でも近世初期の狂歌咄の中における人物像を通して、狂歌咄の方法やその伝承の様相に着目したかったのであるが材少なく充分に果せなかつた。狂歌咄の主人公としては、他に一休や曾呂利、道三、幽齋、その他多くの中世の人物達が活躍し、一休説話、曾呂利説話、道三説話等を成立せしめている。これらはいきなり成立したのではなく、広く巷間に流布しつゝ醸成を見たものが次第に形を整え、書承されたものであろう。然うして成立したものは、しかし、一方で時代を生きた各人物の実像と切り結ぶ点が生じるはずである。それは、それぞれが時代にアピールした人気者達であつたからである。雄長老の場合、その実像に近づくことは、前述の如く、多面的考察の必要上なかなか困難なことではあるが、断片的な小考でも、その両面性が幾分かでも知れたのではないかと思う。彼の著述を一覧すると、五山という伝統を背負いながらも一個の自由人として生きた観も強いのであり、時には五山の頹廢と見なされようとも、己に忠実な心の表現は、当時にあつては新鮮な声だつたのではなからうか。近世人は、更にその在り様を心寛かに受け入れ、狂歌咄として記録した。狂歌咄の原点を、時代と個性の両面において更に深めねばならない。

- 1 『近世初期文壇の研究』織豊期第三章
- 2 「狂歌師雄長老と若狭の五山禅僧」（『禅文化研究所紀要』第3号）
- 3 「『倒病集』の世界——織豊時代の五山文学管見——」（『禅文化研究所紀要』第11号）
- 4 『室町ごころ中世文学資料集』（角川書店・昭和53年9月）
- 5 『醒睡笑研究ノート』（笠間叢書・昭和61年12月）
- 6 付記深沢真二氏研究会提示資料「雄長老出座の和漢聯句一覽」（未発表資料）によると年月日不明ながら、端午の和漢百韻「榮延有発句製五十句而不知懐紙所在須探得於箭底以遂其功者也」（叡山文庫）に、榮延・雄・元倡・牛欄・但阿・善賀と同座している。
- 7 兩足院蔵本
- 8 注6深沢氏資料でも度々和漢連句会に同座し、特に年月日不明ながら「於寺文上人興行」の漢和百韻（叡山文庫）では、雄・文閑上人・楚仙上人・古澗・高倉式部大臣・集雲・寿忍・底相・友務・賢好らと一座している。
- 9 注5に同じ。
- 10 『西日本国語国文学会翻刻双書』中村幸彦氏解説による。
- 11 注3に同じ。
- 12 土田将雄氏『細川幽斎の研究』「文学年譜」による。
- 13 注1および関山和夫氏『安楽庵策伝和尚の生涯』169頁など。
- 14 同氏著、注13

- 15 中村幸彦氏編『未刊文藝資料』第三期（古典文庫刊）
- 16 小高氏『松永貞徳の研究』にも指摘あり。
- 17 早川光三郎氏『蒙求』（明治書院・新釈漢文大系）解説86頁。
- 18 注3に同じ。
- 19 注3に同じ。

〈追記〉慶応大学には、墨付46丁（内扉一丁）、大本（たて211行よこ180行）一冊の写本『三體詩鈔』が蔵せられ、扉には「英甫永雄手沢本」とあり、手付麴様の印形内に「永雄」の印刻がある。旧蔵は「寶玲文庫」で、漢字、カタカナ混じり。字高10行で、扉題は「三躰詩鈔三」、表紙は雨田文繫ぎ地に桐唐草紋様、題簽墨書で「三體詩鈔^{英雄和尙}三」とある。本書が英甫自筆本とすると、五山を中心とする「三體詩」の継承に重要な資料であり、雄長老の『三體詩』への造詣ぶりが確認される書物である。詳細については後考を俟ちたい。

〈付記〉本稿は平成四年度国文学研究資料館共同研究「雄長老の学芸——詩・聯句・狂歌・仮名草子」の共同研究の発表資料を基にしたものであり、両足院本『羽弓集』写真をはじめ、研究会において収集した資料に基づいたことを明記（陽明文庫本詠百首狂歌も同）するものである。また、会員諸氏からは一部後注にも記した通り多くの御教示を賜った。『倒痴集』の年次構成をはじめ、雄長老出座聯句一覽等、今後会員諸氏によって更に詳細な報告が成される予定である。ここに会員諸氏の氏名を記して感謝の微意を表すと共に、資料を提供下さった建仁寺御住職伊藤東慎氏に厚く御礼申し上げる。（会員氏名）大谷俊太氏・堀川貴司氏・宮崎修多氏・深沢真二氏。

〔補注〕

雄長老狂歌一覽（あいうえお順）

略号は以下の通り。△印は存疑歌。二書以上に記載される狂歌のうち歌形の異なるものがあるが、その時は上段記載書に従った。本文は『狂歌大観本』翻刻に従った。今後へのたたき台としてまとめたものであり、御教示、御批正を願うと共に更に補正を加えてゆきたい。詠百↓詠百首狂歌（雄長老狂歌百首） 雄狂↓穎原文庫蔵雄長老百首狂歌 醒睡↓醒睡笑 新旧↓新旧狂歌誹諧聞書 古今↓古今夷曲集 後撰↓後撰夷曲集 銀葉↓銀葉夷歌集 乗合↓狂歌乗合船 続家↓続家つと狂五十↓狂歌五十人一首 古今狂↓古今狂歌仙 寒川↓寒川入道筆記

〔あ行〕

- 1 赤鯛さひ刀にはにたれともきれものとしてや高くうるらん（銀葉）
- 2 秋の日の短きものを長月といふもつこもりてみゆる大小（詠百）
- 3 朝霧のきりの籬のかきのもとをとり行人まるぬれにして（詠百・古今）
- 4 あひみての後の心にくらふれば昔は顔もやせぬ恋哉（詠百）
- 5 雨いたくもるや関屋のやねふきのふき草にとてかるかやの露（詠百）
- 6 家々の軒に蚊鏝をたてならへ天くらふなる夕煙かな（詠百・後撰）
- 7 いくたうしいれとなをらぬひんほうはやまひかうちのいちのひへの（雄狂）
- 8 偽のある世なりけり神無月ひんほう神は身をもはなれぬ（詠百）
- 9 今がはでくゝりたてたるるか鞠松の下ちかくよりてけれな（醒睡）
- 10 売にくる程をしとへは我園のうくひすなとてねこそ高けれ（醒睡・詠百）
- 11 餌さしめかちやくとさすへきさほの川無用心にもなく千鳥哉（詠百・古今）

- 12 おうちうはひうはひおうちことくしなすに居ては何をくはせん(詠百・古今)
13 王ゆへに歩をも馬をもたてをきてかくきやうの外につかふ金銀(醒睡)
14 大なる柿うちはかな二三ほんひんほう神をあふきいなせん(醒睡・詠百)
15 大かきの陣のはりやうへたけにてはやまくれたるしぶのせうかな(醒睡)
16 大空にはゝかる餅をきり置いて霰となして冬やまくらん(後撰・詠百)
17 萩あめる戸たゝく風や秋のくるおさきはしりの案内のこゑ(詠百)
18 鬼はうち福をは外へ出すとも年ひとつつよらせすもかな(詠百・醒睡・古今)

〔か行〕

- 19 かきみすは散を花とそなかめましつめたしとても雪とみましや(詠百)
20 金ひろふ夢はゆめにて夢の内にはこするとみし夢はまさ夢(詠百)
21 かへぬりのつれなくみえし若衆よりあかつちはかりうき物はなし(雄狂)
22 狩人のうそ吹山や鹿の角をさして飛行はち月の空(詠百)
23 川上山吹そむるくちなしかまつ黄なしか井出の玉水(詠百)
24 顔淵にへうたんをこそかりつらめ海にうかはんとおもふ孔子は(詠百・古今)
25 聞た事いはてこらへぬむくひにやしのふる中の名にもたちけん(詠百)
26 灸すへてふしにけふりはたやさねとなをちかくと足引の山(詠百・醒睡)
27 祈禱して正五九月にとるふせを杉のほうにてになふきやうかな(雄狂)
28 君にかゝるおつほね迄も威勢する御代に近江の瀬田のなかはし(詠百)
29 君かかほ千世に一たひあらふらしよこれくて苔のむすまで(詠百)

- 30 金銀をつかひいれたる馬そろへしやうきにたる王の見物(雄狂)
- 31 禁庭の花さへ木さへ見えねとも風かほりくるたちはなかつし(詠百・古今)
- 32 草枕飯をはもたて椎の葉をすくひものにそしたる麦の粉(詠百・古今)
- 33 呉竹のふし見にはあらてはるくくと京まで切にのほり棹かな(醒睡・新旧・古今)
- 34 毛の色を物にたとへは春胡麻のあふらつほから引たいたこと(詠百・銀葉)
- 35 けふかまはこほる雪とそくたけましきえすはあり共餅とみましや(詠百)
- 36 けふたてへい下地かくみろく堂そのあかつちを待とみえけり(詠百・銀葉)
- 37 けふのみか毎夜蚊帳の出入に夏はらひせぬ家々もなし(詠百)
- 38 検地以後物をもくはて田をつくる苗代餓鬼と人や見るらん(詠百)
- 39 恋故に飯はえくはてわりかゆのおもひうちにあれは色やわるけん(詠百)
- 40 こしはりてさゆる夜しるき鉄炮のゑんせうのことく霜やをくらん(詠百)
- 41 小しより来るとはいはしかりたかになくなるこゑはふとくとして(詠百)
- 42 御親父の貧乏の神をやきはらひ惣吉事にやならんとすらん(醒睡)
- 43 御前ではちやくと歌よむつほなれは口をはられて物もえいはず(醒睡)
- 44 碁盤まで本因坊が能を見は目は白黒くなりぬへきかな(醒睡)

[や行]

- 45 さくら咲とを山までの花見にはなかくしくそもてる中食(詠百・醒睡)
- 46 桜にはあらぬ春辺をこきませて枝をたれたるはこ柳かな(詠百・古今)
- 47 さしさまに軒のをそひの石にあてゝ菖蒲刀のははおれにけり(詠百・後撰)

48 さみたれにかひてなり共所々はげのひたいに毛かはへよかし（詠百）

49 さをとめにもまれてしはしおへつかぬけふの早苗そなえて見えぬる（詠百）

50 死ぬるとててこせぬことをしたいたはそもたれ人の所行無常そ（詠百・古今）

51 しはらくはむなさはきしてしはくとふるひこゑなる新枕哉（詠百・古今）

52 修行とて水に腰よりしもつけのなす野のはらはいかにくたらん（醒睡）

53 しうとのゝ秘蔵の梅をかいたらはすはるのさきてはなやつくへき（詠百・古今）

54 しうのため引のほれとも氣にあはてつかひかくひをきり原のこま（詠百）

55 朱をませて漆ぬるてもみちはもまつあき風にまけてちるらん（詠百・醒睡・古今）

56 虱ほと世にへつらはぬものはなしむさき人には殊に近づく（古今）

57 数寄屋あらぬお茶やむかしのお茶ならぬ我身ひとりはうすのみにして（醒睡）

58 巢をは跡に残し出たる谷川の魚にはけつとなくひなくなり（詠百）

59 西浄のしりかさちかく来るほたる是や高野の飛火なるらん（詠百）

60 撰家まで供奉する君か御狩場にすへて出たる鷹司との（詠百・古今）

61 泉水の立石ころひ鳥の名のをしにうたれてしぬるあはれさ（詠百・後撰）

62 そり落しかしら虱はなきとても臍より下はいかにお比丘尼（古今）

〔た行〕

63 竹の子をぬすまれしとてする警固藪から棒をつきたいもて（詠百）

64 立別いなはいねとや思ふらんいまかへれ共いふ人のなき（詠百）

65 田のはたに家は作らし度々の検地の衆の宿にからるゝ（詠百）

- 66 旅人と又たひ人と行あひて道のはたにて恋もする哉（詠百）
67 月出るその方角も卯の花のひかしらみに夜は明にけり（詠百）
68 つほのうちにつくりをきたる菊の酒口をひらけは花の香そする（詠百・古今狂）
69 つみをきる弥陀のつるきや是ならん粟田口より出るよしみつ（寒川）
70 露は袖にいの葉ひけはさそなをくかならず汁にしたるならねと（詠百）
71 △ときくはよそへもおしやれひんほ神いちこのうちとやくそくはせず（雄狂）
72 所からその頼政かゆうれいもあらはれ出る宇治の網代木（詠百）

〔な行〕

- 73 なかくとしやつきとしたる鬚をなとちんちりんとひねる松むし（詠百）
74 夏の夜のふすかとすればへとゞきすひる一声にあくるしのゝめ（詠百）
75 難波人よしやともいへ我目には神も照覽伊勢の浜萩（詠百・後撰・統家）
76 なまめきて男山にし立ぬるをみなへしつくる秋の夕風（詠百）
77 南無阿弥陀四十八までなからへて今そおもむくしての山中（醒睡）
78 奈良油煙初瀬出さまにおとしつゝ小野炭にてや手ならひの君（詠百・古今）
79 ぬひめ付に雲ゐの雁をそめたるはたかかたきぬのもちの関守（詠百・古今）
80 ねらひよりてすつとはつさは面目を灰にまふしの射手とこそいはめ（詠百）
81 乘ありく芦の葉風に達磨方下焦ひしてや冬はきにけん（詠百・後撰）
82 のりくらのまへにあまれる大へのこ金福輪とこれやいふらん（醒睡）
83 法の庭にたんなたてなるかほくしてつちかためをやひからかすらむ（雄狂）

〔は行〕

84 灰の中に物のふすほるうつみ火はもちをやくかとゆかしくそみる（詠百）

85 蓮にのるたくひは異香くんす也花には仏葉にはさし鱈（詠百）

86 橋たてのまつのおくりも入海の浪もてぬらす文殊尻哉（詠百・醒睡・古今）

87 花の露もひかけうつれはひるにしほひるはしほくとなれるあさかほ（詠百）

88 花見する供衆のはなす鉄炮にあたらしとてやかへるかりかね（詠百）

89 春毎に去年より物の見えぬ目は空にしられぬ霞なりけり（詠百）

90 春雨の風にしたかふかいたうはしるくなれともはやかはきけり（詠百・醒睡・古今）

91 春のくるしるしを見せて神垣や三輪の杉針立かすみかな（詠百・乗合）

92 春の日の光に雪や消るとて家々のせとにあたまほすみゆ（詠百）

93 春の日は長鐘なれとさゝのはの一夜はかりになれる石つき（詠百・醒睡・古今）

94 備中鍛冶はむね作りにうつ刀是や二葉のあふひなるらん（詠百）

95 人はみな萩を秋といふいな我は米の出くるを秋とやいはん（詠百）

96 ひとよにてあかれし事はそひふしにゑりのうすさやさくられにけん（詠百）

97 百姓のうすゝるころのきぬたにはつち打賃にぬかやくれなん（詠百）

98 △ひむほうのかみと契しとくはたゝよそへゆけともぢやうもおろさす（雄狂）

99 △ひむ○の神とてさらににくからすこのとしまてのなしみとおもへは（雄狂）

100 △ひむほうの神もいつもへゆくならば十月はかりおもひいてをせん（雄狂）

101 貧報の神も出雲へ行ならば十月ことに我は福人（古今）

- 102 △ひんほうの神をいれしと戸をたてよくくみれは我身なりけり(雄狂)
- 103 ひんほうはかたにつきたる片思ひおもひもつかぬ人はことほり(詠百)
- 104 △ひむほうはとなりにあるもむつかしやなにかせかかせさてはもしかせ(雄狂)
- 105 △ひんほうもうちはにきめく物なれや物こひつかひ庭になみゐ[□](雄狂)
- 106 ふちはかまもたち活を取もせてすそ野をくたり露にぬれつ(詠百・古今)
- 107 二日酔起もあからすふしみ山衣うつ也かしらうつなり(後撰)
- 108 法師こそなかれ来にけれ其主やしつみてしぬるこの桂川(詠百)
- 109 坊主たち紫野雪しめ野ゆきれんたい野にて経をこそよめ(詠百)
- 110 盆またて聖霊まつる棚はたにむくる時衆の尼の川水(詠百・古今)

〔ま行〕

- 111 まとひつゝ藤にしたゝかしめられてなんきさうなるまつふくり哉(詠百・古今)
- 112 まねきよせてはかさんとてや秋のゝにふれる狐の尾花なるらん(詠百・古今)
- 113 まるかりしなりもかくるや天人の夜ことにかふる餅月のくはし(詠百・醒睡)
- 114 みこたちの神楽にけはふ唐の土更におもてはしろくとして(詠百・狂五十)
- 115 水うみの上ことくくはりにけり是や近江の二十四氷(詠百)
- 116 水でとくにかはのあやめかきつはたにたりやにたりとにためきにけり(詠百・醒睡・古今)
- 117 めをと中にたゝ二つもつ衣をはかへあひてけふのはつやあはせん(詠百・古今)

〔や行〕

- 118 薬師堂の庭に咲たる花の色はまこともるりのつほすみれ哉 (詠百)
119 やけつらのこりぬたくひか灰になる山のあたまにもゆるわらひは (詠百)
120 やふれしな理にくらからぬ君か代は天下泰平国土あんとむ (詠百)
121 病つきて野辺に初寝をせし春は小まつはひかて風やひきけん (詠百)
122 やよ時雨小猿の尻のなかりせは木の葉の後に何をそめまし (詠百)
123 よふことりよふなもあれはとりとめてちよをのまする御乳こちの山 (詠百)
124 △よもすからおもかけみせてくもりしは月もおもひのほとやしりけむ (雄狂)
125 世をはなれかゝるさひしきめにあふを山入つたとや人のいふらむ (詠百・古今)
126 よることに式部かそよや洗らしむすふいつみの水のくさよは (詠百)

〔わ行〕

- 127 我恋は拍子もきかぬへたつよみあふ事なしにあちのわるさよ (詠百・古今)
128 和歌の浦や塩干の跡にさすなはのあしにかゝりてたつしめころす (詠百)
129 わつらひは玄旨となをる幽齋のなをもころろは長岡のきやう (雄狂)
130 別路のかたみの風とるたひに我恋ころもうらみくゝて (詠百)
131 我に恋をさするもうるさあまのさかほこしうもない事をして (詠百)